東京バッハ合唱団 月報

［第 750 号］2024 年 12 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO
Monthly Newsletter No.750
December 2024
—
5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

シングイン 2024《クリスマス・オラトリオ》、みんなで歌いましょう
こんな思いで始めました

大村健二（団員）

この「シングイン」という企画、当合唱団では、3 年前の 2021 年 12 月に、この同じ会場で始めました。今回で 4 回目になります。

シングインとは

ステージと客席が一体となって歌うコンサート、客席でも歌える形式を「シングイン」と呼ぶのだそうです。わが国ではヘンデルの《メサイア》をみんなで歌う「シングイン・メサイア」が、すでに半世紀の歴史をもっていますが、バッハの《クリスマス・オラトリオ》に関しては、ここ以外のものを聞いたことがありません。「シングイン・クリオラ (※)」は、ここ荻窪で、3 年前に発祥した、と言ってよいかもしれません。たぶん、と付け加えておきますが……。

*)《クリスマス・オラトリオ》を、勝手に「クリオラ」と略しました。ちなみに、ドイツ語では Weihnachts-Oratorium ですから、正しくは「W:O、WO」などと略します。

シングインが成立する前提条件は、その曲を聞いたことがある人、聴いてこれは素晴らしいと思った人、これは歌ったことがある、歌えそう、歌ってみたいと思うひとが、それなりの人数に達していることです。

日本での《クリスマス・オラトリオ》の初演は調べていませんが、われわれの東京バッハ合唱団も、1963 年の 12 月に小林道夫さんの指揮で前半 3 部を上演しました（立教大学礼拝堂）。早い時期の一つだったと思います。以来、前半/後半 3 部ずつに分けて、すでに各 20 回ほどの上演をつづけています。初演当時は、明治学院グリークラブも池宮英才さんの指揮で取り上げています。そのあたりから、わが国の「クリオラ」の普及が始まりました。

60 年ほどを経て、全国で多くの合唱団が取り上げていますので、曲の愛好者も合唱経験者もかなりの人数になっているのではないでしょうか。シングイン形式での開催が団員獲得に役立ちますよ、という助言もいただいていました。

東京バッハ合唱団の場合

みなさん覚えていらっしゃるはずですが、2021 年といえば、前年あたりからの新型コロナウイルスの感染拡大で、多くの集会やコンサートが中止になりました。

■ピエロ・デラ・フランチェスカ、御子の降誕、15 世紀

練習ができなくなった、本番も中止になった、歌いたいよ～、という声があちこちの合唱仲間からも聞こえてきました。

そこで、機会到来とばかりに諸方面に呼びかけたら、案の定、大入り満員で、他の合唱団の団員さんや当合唱団の OB・OG も加わって、みんなで楽しく〈Jauchzet, frohlocket, auf, preiset die Tage……〉（これが原詞の歌い出しで、うち以外は、こう歌う）や〈喜べや このよき日を……〉（これが当団の上演歌詞）と声を合わせたのでした。昨年は英国人も加わって、英訳で歌っていました。何語でも、何か国語でも、同じ音楽をいっしょに歌うことができます。以来、年末の恒例となって、今回に至っています。

シングインと母語

実は、この「シングイン」という形式は、母語（生まれたときから耳にしている言語）で歌う、という要素も重要だと思っています。

「シングイン・メサイア」の母国であるイギリス（あるいは英語が母語のアメリカ）の年末は、《メサイア》が町にあふれたそうです。最近はどうなのでしょう？クリスマスシーズンになるとあちこちの教会やホール

月報 2024 年 12 月号 CONTENTS

・小布施より、合唱団のみなさま（関 悦子）…… p. 2
・ストラスブールより（遊馬 栄/大村恵美子）… p. 2-3
・連載：退屈するのはいそがしい［46］（大野博人）p. 4

で上演されたのですが、「ハレルヤ・コーラス」のシーンでは、聴衆も我慢できなくなってウズウズしているのだそうです。気持ち分かりますね。これが「シングイン・メサイア」の始まりになったのでしょうか。

彼らにとっての母語＝英語の歌詞 (**) に作曲されているので親しみやすかったでしょう。とくに「ハレルヤ・コーラス」は、歌詞が文語体ではあっても、ほとんどは「ハレルヤ」という掛け声なので、気持ちを込めることが出来たはずです。

**) ヘンデルはドイツ人ですが、大半をイギリスで過ごしています。古い英語訳聖書のイザヤ書など旧約の各書、および新約福音書からの聖句が台本になっています。

ですから、日本で、英米人の真似をして外国語で歌ってしまうのは、どれほど共感しながら声を合わせているのか、ちょっと疑問ではあります。日本の外国文化需要の特殊性が、ちょっと垣間見えています。

われわれ東京バッハ合唱団のコンサートは、原則、大村恵美子訳詞の日本語で上演します。お聴きになった方から次のようなご批判をいただきます。――音楽はもっぱら音の芸術であって、歌詞も音として聴く。だからドイツ語特有の硬質の響きや子音のキレがあってこそのバッハ音楽だ、ことばの流れと音楽の動きの一体性は声楽作曲の要諦……――。その通りです。大いに同感するところでもあります。そのうえで、意味を自然に味わうことができれば良いのですが。

実際に、日本語でのバッハを体験してみて、いろいろ感じ、考えてみてください。

《クリスマス・オラトリオ》

作曲者バッハは、12 月 25 日の降誕祭から 1 月 7 日の顕現祭までのクリスマス期間のために、全 6 部からなる物語音楽を書きました。よくご存じの場景が連なります。出典（新約聖書「福音書」）の朗読を挟みながら歌い、あるいはお聴きください。

バッハの教会作品は、音楽で描かれた絵画といわれます。前ページの「御子の降誕」図は好きでなんども使いまわしていますが、地べたの、ゴロっと置かれたキリストが愛らしい。その偉大な素朴がバッハのオラトリオに通じる、と思うのですが、如何でしょうか。

■冬の新宿御苑（撮影：千葉光雄、2022/12）

◆月報バックナンバーは，当団ＨＰからご覧いただけます.
http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm

お便り（小布施より）

東京バッハ合唱団のみなさま

関 悦子
（小布施町議会議員、小布施町文化協会長）

朝晩はすっかり冷たくなり、木々の葉も少しずつ色付いて参りました。

お健やかにお過ごしでいらっしゃいますか。10 月号月報、ありがとうございました！

8 月の小布施音楽祭（第 23 回、8/3 と 8/24）から 1 か月後の、バッハ合唱団のみなさまと暑い中での楽しい時を持てましたことは、本当に嬉しく、多くの方々に喜んでいただき、主催した甲斐がありました。

創設者であり、指揮してくださいました大村恵美子先生には、大変驚きと尊敬の念を抱いております。何よりも音楽に対する熱いものを感じさせられ、からだ全体から発する大きな力とオーラを感じさせられました。いつまでも先生のご指導が続いていかれますことをお祈りしております。

小布施音楽祭や小布施楽友会、そして小布施文化協会の仲間たちと芸術文化の発展を願って、小さな、小さな町で励んでおりますが、時代の流れは様々な方向に進み、年々悩みが増し、頭も身体も追いつきません。

またお会いしましょう。ご自愛ください。

（令和 6 年 10 月 25 日）

お便り（ストラスブールより）

2024 年を終えるにあたって

遊馬　栄（元団員、ストラスブール在住）

大村恵美子様

令和 6 年も残る数週間になりました。寒暖の差が激しいこの頃ですが、お元気でお過ごしでしょうか?

La Petite France［プティット・フランス、ストラスブールの地区名、観光名所：編集部付記］の一角にある l'Eglise du Bouclier［ブークリエ教会、プロテスタント改革派］の前を通るたびに、貴女のバッハ音楽の原点がここにあるのではないかと思っています。

以降半世紀以上、恵美子さんはバッハ合唱団に絶えざる情熱を捧げ、バッハ文化とはほど遠かった私たち青年を、当時日本一と言われるほどの合唱団にまで仕上げ、続く若者たちは次から次へと貴女の描くバッハ像を相続し、みんなの遺産形成に寄与してきました。まったく嬉しい限りで心からお礼申し上げたいと思います。

ストラスブールの街並みにイリュミネーションが灯され Vin chaud［ヴァンショー、香辛料などをすり込んで温めたワイン］の香りが漂う中で人々は忙しそうに行き交っています。サントマ教会［モーツァルトやシュヴァイツァーもオルガンを弾いた］の前で耳を傾

けてみると、オラトリオの歓喜の波に乗った〈よ・ろ・こ・べ・や〉が聴こえてくるような気がします。

ノエル［クリスマス］と復活祭はフランス人にとって精神的に特別な“道しるべ”となる時期です。静かに立ち止まり、自分が見失っていた方向を再確認する大切なひとときなのでしょう。人それぞれ進む方角は異なりますが、キリスト誕生の喜びからゴルゴタへの苦難までを胸に新たな決意を誓う時なのです。

俯瞰して世界を見渡してみると、至る所で主張の違いが争いを生み、それが平然と人を殺す戦争にまで滑り込んでいく愚かさ。人はその愚かさに気づいていると思います。でも声をあげて、違う、と言う力がないのが現実です。それとも自分には関係ないと思っているのか……。

人の心は荒れています。民主主義か専制主義か、成長か縮小か、真実か虚偽か、自己中心主義か愛他主義か、生成 AI の不法操作、そして究極的には、Bien（善）か Mal（悪）か、等々……。こうした乱立した標識の前に呆然とたたずんでいます……。だからこそ、ノエルは自分自身と向き合う貴重な時間なのかも知れません。

キリストがもたらす喜び、心の平安、悲しみ、そうした「神の言葉と民の心」を旋律にして表現したバッハの偉業には、飽きることなく何度聴いても心が奪われます。オラトリオは喜びと光の祭典です。マタイ受難曲は涙流さずには歌えません。それは言葉と曲の編みものだからだと思います。

私は、恵美子さんがバッハの旋律を追求していくうえで日本語にとらわれる意味が解ったような気がします。暗いヨーロッパ中世から引き継いだ、人々の微かな喜びとか、深い苦難の心情を、日本人がドイツ語で表現するのはどんなに上手でも本物には届きません。昔、l'Eglise Saint Guillaume［サンギヨーム教会、ルター派］のバッハ合唱団でドイツ語で歌っていた時に痛烈にそれを感じました。自分の言葉で感情を表すほど気持ちの入った温かな表現はありません。

ますます寒くなりますので十分にご自愛の上お元気で楽しい掛け替えのない毎日をお過ごしください。

静かな喜びを感じるノエル、そして幸せに包まれた新年 2025 年をお迎えになることを心から願います。

＊＊＊

［編集部：その後の団員のみなさんに自己紹介を、とお願いしたら、以下を追伸してくださいました］

1973 年 6 月 20 日にフランスの地を始めて踏みました。65 歳で自動車業界を引退し現在は 76 歳です。息子 3 人（39，36、32 歳）もそれぞれ独立し、今は妻ニコル（70 歳）と隠居生活を送っています。日本へは 2 年に 1 度、3 か月の長逗留をして日本の文化に浸っています。その度に、フランス帰国時には何十冊もの歴史小説を持って帰り、大事に読むのが習慣になっています。そしてそれをフランス中世史と比べて、人間の普遍性みたいなものを感じて楽しんでいます。

私の義母エレオノール（元小学校教員）は 98 歳です。妻が時々Scrabble の相手をするのですが、勝てるのは 3 回に 1 度。

恵美子さんのバッハ像の探求心は年齢に係わりなく進歩しているのでしょう。それを聴きに来る観客も多々いると思います。そしてバッハ像の Graal［聖杯］を探し求めるのも人生です。静かなノエルをお迎えください。

＜東京バッハ合唱団 次回公演予告＞

第 123 回定期演奏会

― 日本語演奏・大村恵美子訳詞 ―

■カンタータ第 23 番《主なる神 ダビデの子》
■カンタータ第 34 番《おお永遠の火よ おお愛の源よ》
■《マニフィカト わが心 主をあがむ》ニ長調

・2025 年 5 月 31 日（土）14 時、荻窪教会
・2025 年 6 月 7 日（土）14 時、三崎町教会

［独唱］

藤原優花 Sop1、前田ひより Sop2
中島麻紀子 Alt、野中裕太 Ten、及川泰生 Baß
「バッハと仲間の音楽会」（2024 年 6 月）で好演の若手４人＋１人

［管弦楽］ＡＲＳ、［オルガン］田尻明葉
［合唱］東京バッハ合唱団、［指揮］大村恵美子

＜詳細は後報＞

返 信

大村 恵美子（主宰者）

遊馬 栄様

メールのおたよりをお寄せいただき、まことに有難うございました。ストラスブールの日々のこと、街の姿の記憶も、すっかりぼやけてしまいました。

ここのところ、私は老化のせいで余り人が集まる機会にのってゆかず、家にこもって、遠い過去・近い過去の友人たちとの会話など思い出しては、昨今の世間の風潮に心を寄せ、訳の分からないご時世に至ったものかな！ などとぼんやりしている、これが私の、今の毎日です。

おっしゃる通り、一国が自国だけの成長をめざして、力強い気持ちを盛り立ててゆく……、これは不気味だし、まとめ役が現れて、よかれと意図しながら大衆の指導を始め出す……、これも恐ろしい。どんな本能なのか、となりにミサイルを撃つ……、これは不可解、――こんな具合に、将来の分からなさに、途方に暮れつつあるのが私の現状でもあります。

次回の帰国のおりには、ぜひお声をおかけください。

◆上演用歌詞対訳は，当団ＨＰからご覧いただけます．
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

＜連載随想＞
退屈するのはいそがしい［46］

鳥にしあらねば

安曇野閑人　**大野 博人**

ドン！

いきなり衝突音がした、と思ったら、今度はバサッとなにかが窓のすぐ外に落ちた。鳥だ。ウッドデッキの上で仰向けになっている。

どうやら居間のガラス窓に衝突したらしい。近づいてみると呼吸している。生きている。そっと手に乗せる。温かいが、身動きしない。目はつぶったまま。骨折などの致命的な傷を負ってしまっているのだろうか。外見からはよくわからない。

体調は 16 センチくらい。薄緑色をしている。ウグイスのように見えるが、私には自信を持って名前が言えるほど野鳥についての知識がない。

野鳥がガラス窓に衝突することはよくあるらしい。拙宅はまわりが雑木林で、ガラス窓にそれが映る。野鳥は林が続いていると勘違いして、激突するそうだ。

死ぬこともあるけれど、脳しんとうを起こして気絶しているだけのこともある。

初めてではない。年に何度か起きる。残念ながら即死した鳥もいた。窓を開けていて、迷い込んだ小さな一羽が家の中でしばらく飛び回っていたこともある。

専門家がネットなどで発信している情報によると、気絶している場合はしばらくそっとしておくと意識を取り戻すという。

同じように気絶していたキクイタダキという小さな野鳥を拾い上げたときは、手のひらで急に目覚めて飛び立った。今度はどうだろう。

■気絶したあと、目を覚ましても、まだ手の平でぼーっとしている野鳥（写真提供と説明・筆者）

とりあえず、小さな紙箱にそっとおいて様子を見ていると 10 分くらいしてごそごそと動き始めた。近づくと飛び出して逃げていった。元気になったのだろう。やれやれ。

雑木林には野鳥がたくさん飛来する。種類も多い。ただ最近、マツクイムシの被害が広がりだしたためアカマツの大木を 50 本も伐採してしまったので、訪問客は減るかなと心配していた。だが、相変わらず群れやつがいでやって来ては、広葉樹の枝から枝へといそがしそうにしている。数も減ったようには見えない。ほっとした。

最近は、野鳥の姿や声に心が和むだけではない。ちょっとうらやましいような気分にもなる。

世の中を憂しとやさしと思へども
飛び立ちかねつ鳥にしあらねば
（万葉集、山上憶良）

1200 年以上も昔の貧しい農民の嘆きを詠んだ歌が、相次ぐ憂鬱なニュースに塞ぎがちな私たちの心にも染みる。そうだよなあ、鳥だったら大空に逃げ出せるのに……。

学生だったころも、鳥に思いを託したくなる気分が広がっていたことを思い出す。

1971 年 10 月、ヴェトナム戦争が泥沼化の一途をたどる中、世界的なチェロの巨匠、パブロ・カザルスがニューヨークの国連本部に招かれた。すでに 90 歳を超えていた。長く人前ではチェロを演奏していなかったが、その日は愛器を構えると、こうスピーチした。

「私の故郷、カタロニアでは鳥たちはこう鳴きながら飛ぶのです。ピース、ピース、ピース」

そして、弾きだしたのが「鳥の歌」だ。会場は静まりかえったという。私たちはどれほどかけがえのないものを見失ってきたのだろうか。聴く人に自問を促す短いけれど深々とした悲しい旋律。

同じ年のはじめ、日本でも赤い鳥というフォークグループが「翼をください」という曲を発表、「悲しみのない自由な空に」飛んでいきたいと歌ってヒットした。

閉塞感がつのる時代に生きていると、空を飛び交う鳥たちの姿に、なおさら遠ざかるばかりの解放感を重ねてしまうのだろう。

とはいえ、鳥たちも現実には苦労している。ガラス窓で痛い目にあわせてしまう罪滅ぼしにと、雑木林の木の幹に巣箱を取り付けてみた。

雛が育って「ピース、ピース、ピース」という鳴き声が聞こえてくることを願いつつ。

（団友・後援会員、元朝日新聞記者）

［編集後記］
11 月から 12 月にかけ、2 つの異なった仕様で《クリスマス･オラトリオ》をお届けしています。どう料理しても人類の宝物ですね。よくぞ出会わせていただいた。地球上の町々から、バッハ音楽への感謝の声が届きます（K）